

ワシントン大学図書館研修報告

かとう りょう
加藤 諒
(理工学メディアセンター)

1 はじめに

2018年6月から12月にかけての半年間、ワシントン州シアトルにある州立大学、ワシントン大学（以下「UW」とする）で研修する機会をいただいた。本研修はワシントン大学東アジア図書館（以下「EAL」とする）が日本人図書館員を招聘するTateuchi Visiting Librarian Projectに基づくもので、本学からは筆者で3人目の派遣となる。前参加者の報告^{1) 2)}と同様に、このプログラムはTateuchi Foundation³⁾の資金援助を受けており、渡航費や生活費等の金銭的なサポートを受けることができる。参加者は与えられたプロジェクトや日本研究に対して寄与する代わりに、ワシントン大学図書館（以下「UW Libraries」とする）で行われる会議や北米で開催されるカンファレンス等に参加することができ、最先端の図書館事情に直接触れる機会が与えられる。また本学だけでなく、得られた知見を広く日本の図書館界に還元することが求められている。SNS等を用いて発信することも推奨され、筆者もブログ⁴⁾を開設し、見たことや感じたものを現地から率直に綴った。個別に見学・訪問した図書館の紹介などはこちらを参照していただきたい。

今回の研修ではUW Librariesが所蔵し、さらに寄贈もされた日本の地図資料（外邦図）コレクションの整理をすることが一つの大きな柱であった。同時

に現在筆者が理工学メディアセンターでレファレンス業務を担当しており、図書館が研究支援にかかわっていく必要があると感じていたことからUWや北米の大学図書館の研究支援活動の試みについて知見を得ることを自身の研修中のテーマとして設定した。

2 地図コレクションの整理

コレクションは主に外邦図と呼ばれるものであった。外邦図とは戦前に旧帝国陸軍参謀本部が作成した中国や朝鮮半島など日本本土外の地図のことである。当時の日本本土の地図を内国図と呼び、区別することもあるが、広義には内国図も外邦図に含めることが多い。今回は外邦図と内国図を厳密に区別して記述することにする。

(1) コレクションの内容

着任した当初、UW Librariesではおよそ3,000枚の日本の地図コレクションを有し、現物を確認したところ、その内200枚ほどが外邦図で、残り2,800枚は内国図であった。さらに7月にはOregon State University（以下「OSU」とする）からおよそ4,000枚の寄贈があり、合計7,000枚に及ぶ大部なコレクションとなった。OSUでは日本研究を専門とする図書館員が不在で、手つかずの状況であったためUWが寄贈を受けることになった。外邦図はその作成背景から軍事的要素が強く、日本の敗戦後、U. S. Army Map Service（以下「AMS」とする）に多くが接収され、朝鮮戦争などに活用されたようである。重複している余剰地図は後に米国議会図書館に移管され、最終的に全米各地の大学図書館にも分配された。UWやOSUの地図もこの系統のものである。

(2) 整理方法

地図の整理方法は大きく2段階に分けることができる。所蔵状況の把握と現物の整理である。まずは目録などが整備されていなかったため、現物に記載されている図幅名（地名）などの情報をGoogle Spreadsheet⁵⁾



図1 メインライブラリーのSuzzallo & Allen Libraries

に記述していき所蔵状況をきちんと把握できるようにすることから始めた。記述項目は東北大学の外邦図デジタルアーカイブ⁶⁾を参考にし、図幅名、縮尺、緯度・経度、測量機関、測量年、出版年などの地図としての基本情報については同様に記述することにした。また今回の外邦図・内国図には軍事機密、軍事極秘などの軍事情勢を反映した機密レベルを示すスタンプが押されており、当時の日本の状況を研究するのに役立つと考えGoogle Spreadsheetに記述項目を設けることにした。また、地図にはその時々所蔵館を示す所蔵印が押されているものが多かった。日本時代の所蔵先である東亜研究所や横須賀鎮守府、接收後のAMS、米国議会図書館、UWなどさまざまな所蔵印があり、どういう経緯で流布したのか把握するための情報になると考えこちらでもできる限り記述することにした。

UW Librariesが所蔵している地図の状況を把握することにより、地域や国などのグループごとに並び替えることができるようになり、ようやく現物の整



図2 整理前の外邦図コレクション



図3 整理後の外邦図コレクション

理についても着手できるようになった。現物の状態は予想していたよりも良かったが、それでも四隅が破れかかっているものなども当然あった。しかし、通常扱う図書とは異なり、一枚物の資料で、枚数も大部に及び、大きさにもばらつきがあるなど、今まで整理経験のない資料であったことから、UWのMap Librarianの方に保存方法について相談することにした。理想としては1枚ずつ中性紙のファイルに収蔵していくことだが、所蔵する枚数を考えると現実的ではなかった。そこで、20~30枚程度の地域やグループに分け、まとめて1ファイルに収めることにした。ファイルには地域名やシリーズ名、番号を付与し、Google Spreadsheetにも記述することによって、所蔵の把握とともに利用することが可能になった。

(3) 苦勞した点

地図の整理にあたって苦勞した点は、現物に書かれている情報をどこまで記述するかということであった。整理中にUWの日本研究や国際関係の教員が地図を閲覧することもあり、対応させてもらうことが何度かあったが、人によって研究の観点はかなり異なり、地図そのものとして認識し、現在と過去の地形の変化などを比較したい人、記載されているメモから当時の日本軍の状況を知りたい人など様々であった。地図には大量の情報が記載されているが、リストを作成する際にすべて記述することは時間的に不可能であった。そこで地図としての基本情報と、スタンプやメモ書きなど印刷された後に追加されたユニークな情報について記述することが多くの研究者に役立つのではないかと考えて項目を選択していった。

(4) 公開方法

整理しても利用してもらうためには適切に公開することが不可欠であった。Google Spreadsheetで作成したリストは誰でも閲覧できるように整理中から公開していた。未整理の状態公開することは勇気が必要だが、研究者にとってはすぐに利用できることを大きなメリットとしているようであった。また筆者としても研究者の方々から直接アドバイスをもらうことで整理に役立てることができたと考えている。またコレクションの概要についてはresearch guides⁷⁾を作成、公開することで外部に向けて発信することにした。さらにガイドの中にはCARTO⁸⁾という

ウェブ上の地図情報データベースに緯度・経度の地図情報を入力し、UW Librariesの所蔵状況をマッピングして可視化したものもある。デジタル技術と人文科学系の融合であるデジタル・ヒューマニティーズについては、もはやこれからの研究としては欠かせないものであると感じた。また、所蔵資料をより身近に感じてもらうために、EAL内で展示も行った。

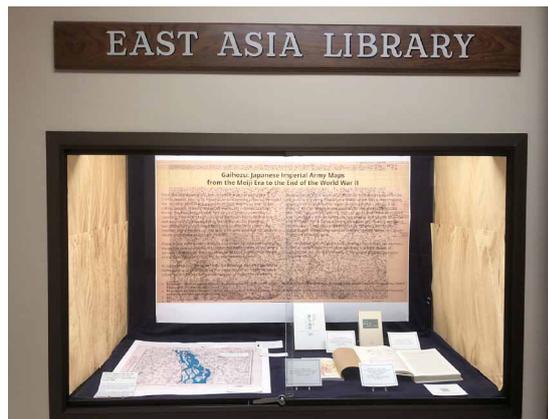


図4 EALでの外邦図に関する展示

(5) 今後の課題

半年間の研修では所蔵状況の把握・整理から公開というところまでで精一杯だったが、今後の課題もある。お金という問題はついてまわるが、より研究に資するように整備を進めていくためにはどこでも誰でもコレクションを参照できるようにし、また現物を保存するためにデジタル化という側面も欠かすことができない。また、アメリカで外邦図を所蔵しているのはUWだけではなくStanford Libraries⁹⁾など多くの大学図書館で所蔵されている。これらの大学図書館の所蔵と合わせて、総合目録のようなものができればより研究の発展につながるだろう。時間も労力もかかり、すぐに実行できる課題ではないが、今後の連携に期待したい。

3 研究支援への取り組み

研修期間中は教員の研究を図書館がどのように支援しているのかをテーマに調査も行った。日本の研究者にとって図書館がサポートできることは何かを考えたかったからである。調査の一つとしてUW LibrariesのScholarly Communication and PublishingというOpen Access (以下「OA」とする)を推進す

る部門のミーティングに定期的に参加させていただいた。また10月にはカナダ・モントリオールで開催されたThe Future of Research Communications and e-Scholarship (以下「FORCE11」とする)¹⁰⁾という学術コミュニケーションに関するカンファレンスに参加したり、California Institute of Technology (以下「Caltech」とする)、University of California, Los Angeles (以下「UCLA」とする)を訪問・インタビュー調査を実施することで、実際の取り組みについて知ることができた。

(1) ワシントン大学の取り組み

筆者の研修が始まったのは、UWがまさにOAポリシーを制定し、教員の承認が取れたところであった¹¹⁾。まずUWには図書館職員と教員用の2種類のOAポリシーが存在する。2017年5月に図書館員用のOAポリシーが制定され、内容はほとんど変わらないが教員用のOAポリシーが承認されたのは2018年6月のことであった。図書館側から積極的に取り組む姿勢から、アメリカにおける図書館員の地位の高さを実感した。教員用のOAポリシー作成・承認の過程では、図書館と教員とが話し合いを持つことで、より信頼関係を密にすることができたことである。またOAポリシーを定めたといっても義務(mandate)ではなく、奨励(encourage)していくということを強調しており、単にOAにすることが重要なわけではなく、OAにすることで社会貢献や研究成果の還元ができるといった理念を共有して、取り組みを進めていると感じた。また、OAの手段としてはグリーンOA¹²⁾の王道といえるUWの機関リポジトリ¹³⁾に著者最終版などの原稿を掲載するだけでなく、arXivやPMC (PubMed Central)などの外部のプレプリントサーバに掲載することも奨励しており、その場合はUWのリポジトリに掲載する必要はないとのことである。あくまでも誰に対してもオープンであればいいという考え方にとても感銘を受けた。

また、OAに関する資金援助の観点についても気になる点であったが、OA誌への論文投稿料のサポートは行っていないということだった。もちろん購読出版社のOA誌に投稿する際などは割引を受けられることもあるので、そのサポートについては行っているとのことであったが、現在は基本的に教員が自

ら助成金を獲得し、研究費から工面することで拠出しているそうである。研究成果を何らかの形で世の中に還元することまで含めて、研究者の役割であるという考え方が浸透していると感じた。慶應義塾では学術研究支援部門で国際学術論文掲載料補助の制度があり、この点については充実しているといえるが、資金には限りがあるし、審査なども必要で全員がサポートを受けられるわけではない。どのような形でサポートしていくのが適切なのか、日本の現状も踏まえて検討していくことが必要であろう。

(2) Caltech, UCLAの取り組み

UW以外にも2018年10月にはCaltech, UCLAを訪問し、OAをはじめとする研究者に対する支援活動について図書館員にインタビューを行った。この2大学を訪問した理由としては、筆者が理工学メディアセンターに所属しているため、自然科学系の大学・研究所の取り組みを知りたかったことからCaltech, すでにOAを進めている大規模校という観点からUCLAがふさわしいと考えたからである。訪問時はちょうどOAウィーク（10月最終週）ということもあり、各図書館でOAにちなんだ展示なども行われていた。CaltechとUCLAでは学生や教員の人数が全く違うので、教員へのアプローチ方法がかなり異なっていたのが特徴的であった。

Caltechでは教員の研究成果をOAにするときは、図書館員が各種データベース等で検索・モニタリングし、出版社版のアップロードが認められていれば、制定・承認を受けているOAポリシーにのっとり、図書館がリポジトリにアップロードをするという作業を行っていた。教員の手をほとんどかけていなかったのである。また著者最終版のアップロードが認められているときは、教員に連絡を取り、入手するようにしていた。教員の人数が300人と少数精鋭であるからできるやり方であると感じた。

一方UCLAではHarvesterというカリフォルニア大学全体の研究成果をモニタリングできる独自のツールを開発していた。これは研究成果を自動でモニタリングしており、新たな論文が発表されると、著者にアラートメールが送られる仕組みになっている。メールを受けて著者はOAにするのに適切なバージョンの原稿をHarvester経由で提出することができるというものである。システムの維持には費用がかか

るが、カリフォルニア大学全体の教員やその成果数を考慮すると、その価値に見合うものと考えているとのことであった。

Caltech, UCLAで方法は異なるものの共通していた考え方としてはOAを進めるうえで教員の負担をできるだけ少なくするということである。日本でも教員が事務作業に割かなければならない時間が多いという声が盛んに叫ばれているが、アメリカでも置かれている状況は同じようであった。このような環境では、OA化への作業を教員に課するのは大きな負担である。OAに限らず、教員の負担をより少なくし、研究に集中できる環境を作り出すことも大きな研究支援といえるかもしれない。

(3) OAの次の段階へ

北米ではOAのさらに先を見据えた活動もすでに盛んにおこなわれていた。2018年10月にはカナダ・モントリオールで開催されたFORCE11の年次大会に参加し、発表されたばかりのPlan S¹⁴⁾ やオープンアクセス、オープンデータを含む、学術情報流通に関する多くの講演を聞くことができた。図書館員だけでなく、研究者や出版社、オープンソフトウェア開発財団などの関係者が出席しており、いつもは意識しない視点からの意見が活発に出された。



図5 FORCE11の様子

中でも、近年では研究で利用した元データの共有等を求められることが多くなっている影響もあってか、オープンデータに関する講演が多く、図書館がどのようにその役割を担っていくのか考えるいい機会になった。個人的に言えば、オープンデータのプラットフォームは研究分野や人によって好みも分か

れると考えられ、数も多いことから現段階でどのプラットフォームが主流になるのか見通しを立てることは難しいと考えている。しかし、もうすでに世界ではOAではなく、その先の展開に向けて取り組みを始めている。日本もOAへの取り組みを進めるだけでなく、修士論文や博士論文レベルに付随する研究データにメタデータを付与して機関リポジトリと一緒にアップロードできるようにしていくことなど、できることからオープンデータに関する検討をしていき、実践できるようにしていくことが大切であると感じた。

4 おわりに

研修中は毎日が刺激的で新鮮であった。その中でも特に強く感じたことは、図書館の日常業務については日本もアメリカも大きな差はなく、違いを生み出しているのは、そこにいる人々だということである。図書館員・教員・学生、出会った人々がどんな立場の人であれ、一人ひとりが目標・ゴールに真剣に向き合い、実現に向けて努力できる力を持っていた。日本人が能力的に劣るとは全く思わないが、新しいことに対してチャレンジするマインドを強く持つ人材が多くいることで常に業界をリードしていけるのではないかと感じた。日本とアメリカの文化の違いも大きな要因であろうが、チャレンジする気持ちを忘れないように日々の業務に取り組んでいくようにしたい。

今回の研修は3年間で3人の日本人図書館員を招聘するパイロットプログラムであり、筆者が最後の派遣となった。しかし、これで終わりになるわけではなく、今後もUW, EALとのつながりを維持し、新たな関係を築いていけるようにしたい。アメリカの東アジア図書館員の横のつながりを目の当たりにしたこともあり、アメリカ国内だけでなく、慶應がUWのパートナーとなり、相互の発展に互いに協力していけるような関係に一步でも近づけるようになったらと考えている。

最後になるが、半年間の研修中には数えきれないほど多くの方々にお世話になった。温かく迎えてくださったEALの館長であるZhijia Shen氏、筆者だけでなく3年に及ぶプロジェクトをコーディネートしてくださった田中あずさ氏、インタビューや見学をさせていただいたUW Libraries、訪問先の図書館

のみなさま、事前にトレーニングを行ってくださったメディアセンター本部のみなさま、そして多忙な業務の中、送り出してくださいました理工学メディアセンターのみなさまに心より感謝したい。

注・参考文献

- 1) 藤本優子. ワシントン大学図書館研修報告. MediaNet. 2016, no.23, p.59-64.
- 2) 川本真梨子. ワシントン大学研修報告: 米国で感じた「日本」. MediaNet. 2018, no.25, p.49-54.
- 3) Tateuchi Foundation.
<http://www.tateuchi.org/> (accessed 2019-07-22)
- 4) 図書館員研修ブログ at University of Washington Libraries.
<http://bloglivedoor.jp/seattle2018/> (accessed 2019-07-22)
- 5) 外邦図 Inventory2018 (updating).
https://docs.google.com/spreadsheets/d/1WjMSrj42744OsCkOnKAe-_58-StJJedwTuCx-VFfS14/edit#gid=1162903304 (accessed 2019-07-22)
- 6) 外邦図デジタルアーカイブ作成委員会. 外邦図デジタルアーカイブ. 東北大学付属図書館/理学部地理学教室.
<http://chiries.tohoku.ac.jp/~gaihozu/index.php?lang=ja-JP> (accessed 2019-07-22)
- 7) University of Washington Libraries. Gaihozu : home.
<http://guides.lib.uw.edu/research/gaihozu/home> (accessed 2019-07-22)
- 8) CARTO.
<https://carto.com/> (accessed 2019-07-22)
- 9) Stanford Libraries. Gaihozu : Japanese Imperial Maps.
<https://library.stanford.edu/guides/gaihozu-japanese-imperial-maps> (accessed 2019-07-22)
- 10) FORCE11.
<https://www.force11.org/> (accessed 2019-07-22)
- 11) Scholarly Publishing & Open Access. "UW Faculty Senate Open Access Policy". University of Washington Libraries.
<https://www.lib.washington.edu/scholpub/open-access-at-university-of-washington> (accessed 2019-07-22)
- 12) グリーンOA. 研究論文を著者自身が機関リポジトリや専門分野のプレプリントサーバなどに搭載すること。セルフアーカイブとも呼ばれる。
- 13) ResearchWorks Archive. University of Washington Libraries.
<https://digital.lib.washington.edu/researchworks/> (accessed 2019-07-22)
- 14) Science Europe. Plan S.
<https://www.coalition-s.org/> (accessed 2019-07-22)